

東京学芸大学 先端教育人材育成推進機構

外国人児童生徒教育
推進ユニット



2024年11月16日
日本語教育学会2024秋季大会
パネルセッション

文化間移動をする若者の社会的包摂における 日本語教育の役割

—高等学校における「日本語指導」の「特別の教育課程」化とその導入状況から—

齋藤ひろみ(東京学芸大学), 米本和弘(同), 市瀬智紀(宮城教育大学), ピニロス・マツダ・デレク・ケンジ(群馬大学), 佐屋麻利子(神奈川県立相模向陽館高等学校)

<共同研究者> 河野俊之(横浜国立大学), 見世千賀子(東京学芸大学), 小西円(同), 谷啓子(同), 原瑞穂(同), 工藤聖子(同)

パネルの趣旨

高等学校における「日本語指導」を

外国人生徒のことばの教育として捉え直す

⇒ 「日本語教育」が「文化間移動をする若者の社会的包摂」に果たす役割を探る

文化間移動をする若者：

家族の移動により複数の言語文化環境下で学齢期を過ごした若者

齋藤ひろみ（東京学芸大学）

本パネルにおける「社会的包摂」

社会的包摂: 社会的排除の対概念で、社会的システムへの参加プロセスを保障すること

生徒の経験と個性・特性が、取り巻く社会との相互作用により承認され、社会構成員として、自己実現の多様な道程を生み出すこと

高等学校における外国人生徒等の「包摂」

教育社会学・異文化間教育学では議論が重ねられているが・・・。

制度・施策の充実、社会構造、マイノリティの人権保障、多様性への寛容性等が軸
「日本語指導」の問題の指摘はあるが、日本語教育の可能性は論じられていない

例) 日本学術会議2020: 「入口(教育機会)」として入試の特別枠・特別措置の設置等と、「出口(教育達成)」として大学入試特別枠の設置等が求められている。

その他: 清水(2020)・児島(2022)・三浦・額賀(2024)

樋口・稲葉(2024)・山本・榎井(2024)・徳永他(2022)等

背景 | 日本語指導が必要な 高校生の状況

令和5年(2023年)度文部科学省 「日本語指導が必要な児童生徒の受入状 況等に関する調査」

日本語指導が必要な高校生

5,573人

(外国籍4,991人, 日本国籍582人)

前回調査(令和3年度)より約16%増

課程別人数

全日制 2,814人

定時制 2,693人

通信制 66人

日本の教育課題として指摘・政策提言(中央教育審議会2021)
文化間移動する若者である外国人生徒等の社会的包摂の実現

表1-1 中退率他

中退率	
日本語指導が必要な生徒	8.5%
全高校生	1.1%
高等教育機関への進学率	
日本語指導が必要な生徒	46.6%
全高校生	75.0%
非正規・一時就職者の率	
日本語指導が必要な生徒	38.6%
全高校生	3.1%
進学も就職もしていない者の率	
日本語指導が必要な生徒	11.8%
全高校生	6.5%

背景2 高等学校の日本語指導の制度化

令和5年度(2023年度)

高等学校においても日本語指導を「特別の教育課程」として編成・実施することが可能になる。

目標が達成されれば単位が認定さる(卒業単位の一部として認められる)

⇒ **出口である卒業の保障に寄与し, 教育的包摂は一步進む。**

令和5年度の実施状況

「特別の教育課程」により日本語指導を受けている高校生

特別な配慮に基づく指導を受けている生徒(約77%)の一部に留まる
外国籍で5.5%, 日本国籍で5.7%

※**実質的教育内容の整備はこれから。制度によって形式的には包摂に留まらず、内実の伴った教育的包摂への転換が求められる。**

パネルの構成

発題(60分)

1. パネルの趣旨

齋藤ひろみ(東京学芸大学)

2. 「特別の教育課程」による日本語指導の導入状況

米本和弘(東京学芸大学)

3. 高等学校の現場から—ことばの力を育てる教科の授業デザイン—

佐屋麻利子(神奈川県立相模向陽館高等学校)

4. 国内の在日ペルー人の教育的包摂

ピニロス・マツダ・デレク・ケンジ(群馬大学)

5. 海外における移民子弟の教育的包摂の課題

市瀬智紀(宮城教育大学)

全体討論 (30分)

全体討議の論点

文化間移動をする高校生・若者が

- ①社会的自立に必要な汎用的な力を得て
- ②所与の社会の在り方を問い直し新たな秩序形成の主体としての「市民性」を育み、
- ③生涯にわたって学習を続け、能動的に社会を構築するために、

市民性教育(ビースト 2016) 生涯学習(鈴木・姉崎 2011)

日本語教育が果たすべき役割とは何か。

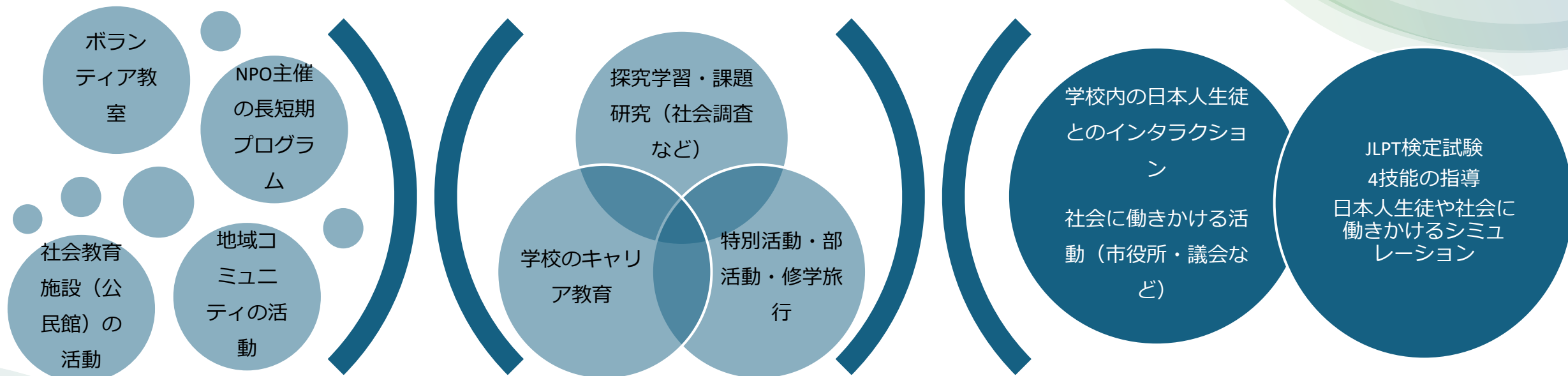
その役割を果たすとき、日本語教育は

「ことばの社会的実践」として、

どこで、誰を対象に、どのように設計、組織、実行されるのか。

実践のプロセスとしての包摂(内藤・山北 2014)

本パネル市瀬のスライドより 外国人生徒の教育的包摂を促す空間



学校外の包摂空間

学校内の包摂空間

日本語教室内外

マツダ発題
地域・コミュニティの
重要な他者

佐屋発題
学校全体の教育変革へ

米本発題
他の教育領域との連携

米本発題
日本語指導

市瀬発題 ガイドラインの事例

予稿集に掲載していない参考文献

- ・経済協力開発機構(OECD)編著/佐藤仁・伊藤亜希子監訳(2024)『構成と包摂を目指す教育 OECD「多様性の持つ強み」プロジェクト報告書』明石書店
- ・児島明(2020)「地域日本語教育を誰が担うのか—ブラジル系移民第二世代の日本語習得とその後—」『異文化間教育』52号
- ・清水睦美(2021)「日本の教育格差と外国人の子どもたち—高校・大学進学率の観点から考える—」『異文化間教育』54号
- ・鈴木敏正・姉崎洋一編(2011)『持続可能な包摂型社会への生涯学習—政策と実践の日英間比較研究』大月書店
- ・恒吉僚子・額賀美佐子(編)(2021)『新グローバル時代に挑む日本の教育 多文化社会を考える比較教育学の視座』東京大学出版会
- ・徳永智子・角田仁・海老原周子(2023)『外国につながる若者をつくる多文化共生の未来』明石書店
- ・内藤直樹・山北輝裕(2014)『社会的包摂／排除の人類学—開発・難民・福祉』(昭和堂)
- ・樋口直人・稲葉奈々子編著(2022)『ニューカマーの世代交代』明石書店
- ・三浦綾希子・額賀美佐子(2024)「高等学校における移民生徒への中退予防のとりくみとその障壁—都立高等学校教師のまなざしに注目して」『異文化間教育』60号
- ・山本晃輔・榎井縁(2023)『外国人生徒と共に歩む大阪の高校 学校文化の変容と卒業生のライフコース』明石書店